

03-13

看護部と薬剤部の連携について ～専任薬剤師の病棟薬剤業務体制の整備～

那須赤十字病院 看護部

○永岡 明子、上杉みつえ、中丸 朗

当院は栃木県北地域の中核病院として、地域医療及び保健指導に積極的に取り組んでいる。活動の原動力は、病院の強みである院内多職種協働・連携の円滑さにある。チーム医療の先駆けである糖尿病教室は20年前に開設し、平成9年からは病院挙げて退院計画を推進している。先の東日本大震災で当院は180床を失う罹災を受けたが、病院が一丸となり旧病棟を整備し100床を開設し、厳しい病院運営を全職員で支えてきた。特に60床の消化器内科・外科（手術以外）である自病棟は、病床稼働率100%・在院日数18日をキープしつつ安全な医療の提供が期待され、各部門の支援を受けてきた。中でも、40名以上の注射及び服薬患者の薬剤業務を担う病棟看護師には、薬剤部から内科・外科の病棟担当薬剤師2名の配置は大変心強い支援であった。当院では平成24年7月の新築移転を機に、全病棟に専任薬剤師を配置し病棟薬剤業務実施加算の取得を目指している。そこで、病棟担当薬剤師2名がいる自病棟がモデル病棟となり、専任薬剤師が病棟薬剤業務を円滑に実施できる体制の整備に取り組んだ。体制づくりにあたり、平成10年から看護部と薬剤部の連携で病棟薬剤関連業務等の改善に取り組んできた経過を整理した。その作業を通して、院内他職種と協働・連携の強さを再確認することができ、体制づくりにも大いに役立った。今回、これまでの病棟薬剤関連業務の改善経過及び内容、専任薬剤師の病棟薬剤業務の体制について報告する。

03-15

赤十字病院における専門看護師の活動1-活動の現状と成果に焦点を当てて-

京都第一赤十字病院 看護部¹⁾、北見赤十字病院²⁾、日本赤十字専門看護師会³⁾

○山口 舞子^{1),3)}、田中 結美^{1),3)}、部川 玲子^{2),3)}

【目的】日本看護協会が資格認定する専門看護師は、現在全国で11分野745名おり、複雑で解決困難な看護問題を持つ個人、家族・集団に対する高度看護実践とケアの質の維持向上・発展に寄与する。2009年日本赤十字専門看護師会が発足した。赤十字病院における専門看護師の活動の現状とその成果について報告する。

【方法】日本赤十字専門看護師会会員のうち同意の得られた専門看護師を対象とし、2011年度の活動状況を調査した。倫理的配慮：活動内容の提出をもって同意が得られたものとした。

【結果】現在、日本赤十字専門看護師会の会員は24名である。看護協会が認定されている11特定分野のうち、在宅看護を除く10分野（がん看護、精神看護、地域看護、老人看護、小児看護、母性看護、慢性疾患看護、急性・重症患者看護、感染症看護、家族支援）の専門看護師が活動している。病棟・外来において患者・家族への直接ケア、医療スタッフからのケアに関する相談、組織横断的な活動に加え、倫理検討会、教育活動、研究支援、院外施設での講義や共同研究等を行っている。実践、相談、調整、倫理調整、教育、研究の6つの役割を果たし、サブスペシャリティーをもち活動している専門看護師もいる。個人・チームのケアの質を上げるための具体的方策・提案を行い、事業企画や実行のサポート等、活動成果を積み重ねている。

【考察】厚生労働省は専門・認定看護師の広告を認めており、病院案内・各種出版物、ホームページ上に活動概要を紹介する等、医療施設を選択する際の有用な情報の一つとして提供できる。今後アウトカムを積み重ね、看護の専門性を広く知らせるための活動を継続しつつ、全国赤十字病院が連携し専門看護師を有効活用できるシステム構築が課題である。

03-14

認知症ケアチーム委員会の取り組み -アンケート調査から見る成果と課題-

庄原赤十字病院 看護部

○本田 利美、廣田 征子、城戸口美奈、田中真由子、廣畑 泰三

【目的】高齢化に伴い急性期疾患で認知症を有する入院患者が増え、認知症症状の為に治療に支障をきたす症例が増加している。急性期疾患と同様に認知機能にも視点をおき関わる必要があり、認知症ケアの質向上は緊要である。平成22年より認知症ケア専門士9名を含む多職種で認知症ケアチーム委員会を発足し取り組みを始めた。全職員対象に研修会を重ね、対応困難事例の検討や認知症の診断がついていない患者の認知機能スクリーニングを実施してきた。その後の看護師の認知症ケアに対する意識の変化について調査し成果と今後の課題を検討する。

【方法】平成24年3月、病棟看護師109名にアンケート調査を実施。91名の有効回答があり、回収率は84%。

【結果】アンケートでは71%が知識や関わり方により変化があったと回答した。その内容として、症状の原因に視点に向けた患者理解と受容的姿勢や個別ケアの模索、看護師の気持ちの余裕を挙げている。スクリーニングにより認知機能を把握しようと意識変化した人は68%であった。一方で事例検討がタイムリーに実施できない事もあり、現場で活用されていないという意見も挙げられた。

【考察】研修会や事例検討、認知機能スクリーニングは認知症ケアの質向上に効果があった。今後の課題として1.スクリーニング結果の有効な活用方法 2. タイムリーな事例検討と現場へのフィードバックが挙げられた。また、入院期間が短い急性期病院では、より速やかに経過を評価し対応する事が求められる。

03-16

赤十字病院における専門看護師の活動2-活動の変遷に焦点を当てて-

京都第一赤十字病院 看護部¹⁾、北見赤十字病院²⁾、日本赤十字専門看護師会³⁾

○田中 結美^{1),3)}、山口 舞子^{1),3)}、部川 玲子^{2),3)}

【目的】2009年、赤十字の施設などにおける高度看護実践とケアの質の維持向上及びその発展に寄与することを目的として日本赤十字専門看護師会を発足した。会員数は2012年5月現在全国に10分野24名に達した。日本赤十字専門看護師会に所属する専門看護師の活動の変遷について報告する。

【方法】対象：日本赤十字専門看護師会に所属する専門看護師を対象とした。データ収集：調査に同意の得られた専門看護師の2010年と2011年の活動報告を分析対象とした。倫理的配慮：活動内容等の提出をもって同意が得られたものとした。

【結果】専門分野は、2009年がん10名、急性・重症集中1名、慢性1名、小児1名、老人1名、母性2名の6領域16名であったが、2012年5月現在がん14名、急性・重症患者2名、小児、慢性、母性、地域、精神、老人、感染、家族が各1名、10領域24名となった。組織の位置づけは、看護部長直属、看護部フリーポジション、地域医療連携センター、総合医療相談室、病棟、外来など様々であった。活動内容は、専門分野に関連する実践・調整・相談・倫理調整を行い、教育、研究に携わり、専門看護師の6つの役割を果たしていた。また、緩和ケアチーム、人工呼吸器ケアサポートチーム、ICTなど組織内のチーム活動の推進、専門性を生かした専門外来（助産外来、腎移植後患者の移行期の支援外来など）の立ち上げなど、専門看護師としての役割が拡大してきていた。

【考察】専門看護師は、領域の特性を生かし、患者・家族の多様なニーズに応えるとともに、組織横断的に活動しチーム医療の推進を担っているといえる。今後赤十字専門看護師会の連携を深め、赤十字全体の看護の質の向上に貢献していくことが課題である。